GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　57

都市と故郷の往還的移動による家の維持

― マレーシア華人社会における女性の労働と子どもの養育をめぐる人類学的研究 ―

櫻田 涼子
（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）

2011 年 12 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

1. はじめに

本稿では、マレーシアの都市と故郷を往復しながら「子育て」と労働を両立する華人女性の養育実践に着目し、マレーシア華人社会における家族関係の実際を明らかにすることを目的とする。

これまでのマレーシア華人社会を対象とする研究の多くは、漢民族社会研究の系譜上に当該社会を位置付け、対象を父系社会として分析する傾向にあった［e.g. Chang 1990; 櫻田 2008, 2010］。マレーシア華人社会における親族関係は、確かに父系出自理念によって関係づけられる側面が否定できない[1]。しかし、彼らの日常生活における子どもの養育実践に視点をずらして当該社会を概観してみると、父系系譜関係によってのみ社会が維持されるのではなく、時には母系の関係により子育てを行うなど、双系的ネットワークにより関係が柔軟に維持される側面もあることが分かってきたのである。

そこで、本稿ではこれまで固定的に父系社会として位置づけられてきたマレーシア華人社会を新しい視点から分析するための出発点として、今日のマレーシア華人社会における多様な子育て実践の一部を紹介し、家族関係の実際を明らかにすることを目指す。

次章では、まず多様な子育て実践を生み出す要因ともなっている出稼ぎ先としての都市と、老親を残し「家」として認識されつづける故郷の関係を描くため、マレーシア華人の都市集住傾向について概観したい。その上で、都市移民社会と漢民族社会研究の議論を参照しながら本研究の特徴と意義を明らかにする。第 3 章では、調査地と調査対象である 4 組の夫婦の概要を示す。第 4 章では、この 4 組の事例夫婦の子育て実践が時間の経過とともにどのように変化したかというバイオグラフィカルな視点から事例を記述し、賃金労働に従事する華人女性の養育実践と家族関係の実際を記述する。最後に、本研究で明らかになった点をまとめた上で考察を行う。

2. 関心の所在と研究の視座

2.1. マレーシアの都市化と変化する社会関係

約 2700 万人のマレーシア人口は、都市への集中傾向にある。クランバレー（Klang Valley）と称される首都クアラルンプール及びその周辺に点在する複数のベッドタウンを擁するスランゴール州の人口は約 670 万人で、マレーシア総人口の約 4 分の 1 が首都圏近郊に集中している。マレーシア国内最大の都市圏クランバレー以外には、ペナン約 154 万人、ジョホールバル約 146 万人、イポー・キンタ地区（ペラ州）約 83 万人といった都市圏がある［DSM 2008: 57-58］[2]。

マレーシアにおける都市集住傾向は、マレー人やインド系マレーシア人などの民族集団

---

[1] これは、筆者のこれまでの住宅研究においても明示されてきた点である。例えば、マレーシア華人の日常生活では父系に限らない女性親族間関係などの多様な家族関係が見られるが、それでも重要な局面（住宅改造や部屋の使用者交替など）においては父系系譜関係が強調されるのである［櫻田 2008］。

[2] いずれの都市もマレー半島西部に集中している。

と比較した場合、華人においてより顕著である。例えば、マレーシア華人の都市居民割合は、1970 年の約 47%から 2000 年には 86%に上昇している［DSM 2001］。また、都市の華人人口の約 65%がクランバレーの伝統的華人集住地区、あるいは 1960 年代以降に郊外に建設された住宅団地に集住し、一大コミュニティを形成しているという［Lee 2004: 127］。

マレーシア華人の都市への集住傾向が顕著である一方、マレーシア華人は決して都市に安定的に居住しているわけではなく、都市に住まいを構えた後も頻繁に国内移動を繰り返す。彼らが移動する主たる理由は、例えば旧正月前夜の「団円飯」と称される一家揃っての食事や、清明節の墓参り、あるいは選挙民登録を行った故郷で投票するためなど実に様々である。多岐に渡るこれらの移動の詳細をみていくと、移動の実態は日常生活を営む都市と彼らの出身地である故郷という 2 つの場所を交互に行き来する往還的移動であることが分かる。つまり、彼らは制約もなく無秩序に移動を繰り返しているのではなく、ほぼ決まった地点を往復移動しているのである。

人文地理学者のリー・ブーントンは、都市郊外に居住するマレーシア華人の多くが、都市部の居住地に対し愛着や場所への感覚を育むことができずにいる一方、長期間に渡ってそこには不在であるにもかかわらず故郷に対してはノスタルジックな場所の感覚、「場所性（placeness）」を持ち続けることを指摘する［Lee 2004］。リーは、このような現象を都市郊外の「没場所性（placelessness）」の問題としてやや単調に論じているが[3]、筆者はマレーシア華人にとっての故郷[4]はノスタルジックに夢想される観念的な場所なのではなく、また都市は無味乾燥な没場所的場所なのではなく、どちらの場所もマレーシア華人にとっては往還的移動により構成される生活世界の重要な一地点であると考える。つまりどちらか一方の場所のみで彼らの生活が成り立つのではなく、それぞれを往来することにより成り立つ領域的生活世界がマレーシア華人の間に存在すると仮定することができるのである。

マレーシアや香港の都市労働者の循環的移動を論じたジュディス・ストラウチは「移動する人びとはふたつの領域にまたがって生きている」［Strauch 1984: 60］と述べ、移民の暮らしは故郷と都市を単線的に移動して完結する行為ではなく、2 つの領域の往来によって成り立つものであることを指摘している[5]。ストラウチの議論が興味深いのは、農村と都市の循環的移動の過程において、新しい社会関係が創出されていることを指摘している点で

---

[3] リーは“placelessness”という語を用いているが、現象学的地理学者のエドワード・レルフ（1991）を引用してはいない。しかしリーは、レルフが議論する「没場所性（placelessness）」とほぼ同じ文脈でこの語を使用していると思われるため、ここでは “placelessness”に「没場所性」という訳語をあてた。

[4] ここでいう故郷とは、マレーシア華人の祖先の出身地である中国南部の僑郷ではなく、マレーシア国内のホームタウンを指す。

[5] ケニヤのナイロビで働く出稼ぎ労働者を調査したロスとウェイズナーは「空間的に分離された農村と都市の社会システムは、しばしば社会的、経済的、政治的な相互依存関係にある。（中略）人びとは、一方の場所から得られる資源を利用し社会的紐帯を強化しながら、他方の場所における生活をより安定化させることによって、2 つの場所との関わりを最大化しようと試みる」［Ross and Weisner 1977: 360-361］と述べ、都市と農村との密接な関係を維持することは、都市労働者にとっての生命線であることを指摘している。

ある。例えば、ストラウチは世帯単位の農業生産を基礎とする父系社会において「娘」や「嫁」という女性に付される役割は、賃金労働に基づいた経済システムに移行すると曖昧になり、また女性に与えられる選択の幅が広がることにより従来の伝統的父系社会にみられた親族関係が変化すると指摘する。また、ドーアやスウィーツァーの研究［Dore 1958; Sweetser 1966］を引きながら、都市化する父系社会では母方親族とのつながりが強まり、父系と母系の双方の親族関係を維持する双系的傾向がみられることを述べた上で、ストラウチが調査を行った都市への出稼ぎ労働者が多い華人新村では、より柔軟な社会経済組織が求められ、父系出自や父方居住といった漢民族社会の伝統的にみられた親族関係が弱体化しつつあることを指摘している［Strauch 1984: 61-67］。

人びとが都市で賃金労働に従事する経済システムに移行し都市化が進展すると、伝統的父系社会においてみられた女性の役割は変化し、母方親族との強いつながりが維持されるようになるというストラウチの議論に従うならば、都市と故郷を往還的に移動し賃金労働に従事する女性が増加するマレーシア華人社会でも、伝統的に女性に付与された役割は変化し、母系的関係が強化されるのだろうか。

具体的な事例を紹介する前に、次節ではまずこれまでの漢民族社会研究におけるリニージ・パラダイムと父系出自理念について概観した上で、先行研究において女性がどのようにとらえてきたかを示したい。

2.2. リニージ・パラダイムと父系親族概念からはみ出してしまうもの

フリードマンによる宗族研究［Freedman 1958 (1991), 1966 (1987)］から派生したリニージ・パラダイムの隆盛により、漢民族社会は祖先から子孫までの男系系譜を概念化した父系出自理念によって結び付く父系社会であるとされ、漢民族社会を研究する人類学者の多くが、父系出自理念は他のどの社会組織概念よりも重要視される漢民族社会の前提とみなすようになった［Watson 1986; Waltner 1995; Stafford 2000］。

1979 年に発表されたフリードマンの著書 *The Study of Chinese Society* には次のような一節がある。

> 親族が中国社会におけるたくさんの人びとを結び付け、政治や経済、宗教に多大なる影響を与えることは明白である。しかし家族は全く別個の事象である。基本的に家族の領域とは家庭生活であり、共住の領域であり、炉や子ども、結婚といった出来事に常に巻き込まれることである。このように親族は全く別のものである。［Freedman 1979: 240-241］[6]。

[6] 原文は以下の通りである。“We can show without much difficulty that kinship bound together large number of people in Chinese society and exerted an important effect on their political, economic, and religious conduct at large. Family is another matter. Essentially, its realm is that of domestic life, a realm of co-residence and the constant involvement in affairs of hearth, children and marriage. Kinship is something different.”

この一文に明瞭に表れているように、フリードマンは親族（kinship）と家族（family）を明確に区別した上で、政治経済的な社会組織としての親族集団に焦点をあて漢民族社会研究に取り組んだのであり、フリードマンの研究に影響を受けたその後の漢民族社会研究が、父系親族組織の議論を中心に進展したのはある意味当然の潮流であった。

フリードマンは、当時イギリスの構造機能主義人類学で展開された出自理論に立脚し、アフリカ社会のリニージ組織と中国のリニージ（宗族）を通文化的に比較分析する視座からその研究を始めた。宗族とは、中国社会をインフォーマルに統合する役割を有するものであると指摘し、それまでの中国社会研究において主流であった村落社会を完結した小宇宙ととらえる視点とは異なる視点を提示したのである［瀬川 2004: 71-73］。

社会人類学者チャールズ・スタフォードは、フリードマン以降のリニージ・パラダイムによりもたらされたのは、「生まれながらに決定される父系出自集団という厳密に定められた男性中心システム」と「分裂をもたらす部外者としての女性」いう漢民族社会の固定的イメージであり、そこでは、実際の流動的で、交渉可能で、分裂的ではなく成員を結び付ける過程的なつながりの実際が看過されてしまうことを指摘した上で、過程的で創造的な漢民族の親族組織の在り方について目を向けるべきであると論じる［Stafford 2000: 38］。

また、台湾をフィールドとし漢民族社会における姻族関係を研究する植野弘子は、天上で最も偉大なのは天公、地上で偉大なのは母方オジであるという「天頂天公、地下母舅公」ということわざを引きながら、台湾の漢民族社会において女性が介在する関係の重要性を指摘し、非父系親族や姻族の持つ役割について考察し、父系出自体系における女性をめぐる問題、特に出生集団における女性の役割についての議論がこれまでの漢民族社会を対象とした家族・親族研究において十分に行われていないことを指摘している［植野 2000］。植野の指摘は、これまでの漢民族社会研究では、女性は家族の間を移動する不確かな存在として二次的に捉えられてきたことを示すものであり、父系親族概念という理念に焦点があてられるあまり、姻族の重要性や父系親族組織の特徴からは乖離する漢民族社会の日常実践が看過されてきたことを浮き彫りにする。

マレーシア華人の家に暮らし生活を共にしていると、様々な日常実践から男系嫡子を優先する様子が頻繁にみられた。ここから、確かにマレーシア華人社会においても父系理念が何よりも遵守されていることを読み取ることができるだろう。しかしながら、未婚の娘は、家計を支え甥の教育にも携わり、家のことにも積極的に口を出す。また女性は一度婚姻関係を結び生家を離れたら決して戻っては来られない、家から切り離される成員として観念的には捉えられているが、婚出した娘が頻繁に里帰りし生家に居場所を獲得し子育ての協力を得ようと試みることもあれば、婚入した嫁が頻繁に嫁ぎ先と生家を行き来しながら姉妹や母親との親密な関係を維持する実践もみられる。

つまり、父系出自理念は人びとの間に「あるべき関係」を作り出す概念としてみなされてきたわけだが、その周辺には当然ながら非父系の諸関係が多数存在している。しかしこれまでの漢民族社会研究では、それらは父系系譜関係からすると「例外」や「あるべき関

係の変化した形」として捨象され続けてきたのである。次節では、この看過されてきた「あるべき関係」が逸脱した形としての非父系の諸関係と女性の存在についてもう少し考えてみたい。

2.3. 漢民族社会研究における女性の位置づけ

漢民族社会には、父系出自と父系親族の理念を表わす「宗（*tsu*）」という言葉がある。植野によると、「宗」による親族の分類は、婚姻、服喪の規定、そして祖先祭祀の義務などに端的に現れ、「同宗」の者によって「宗族」が組織されるという。「族（*zu*）」も「宗」と同様の意味をもち、特に父系親族の集合を表す一方で、「親族（*qinzu*）」が父系親族のみを指すのに対し、「親戚（*qinqi*）」という言葉が婚姻によって生ずる姓の異なる者による親族的関係を指し、両者は明確に区分される[7]。このような父系と非父系の対立的な区分は、漢民族社会の親族分類の基本である［植野 2000: 16-17］。

このように、漢民族社会では父系出自理念に基づく親族分類が明確に行なわれていることから、これまでの漢民族社会研究では父系制（patrilineality）、父方居住（patrilocality）、家父長制（patriarchy）などの「父（patri-）」である男性を起点として親族関係を理解しようとする視座が中心となり、それは時にエリートモデル、あるいは理想的モデルに過ぎないと批判的に検証されながらも、長らく漢民族の社会組織研究における中心的研究枠組みとされてきた［Judd 1989: 525; 植野 2000: 22］。

漢民族社会研究における親族関係や社会を男性中心的に分析する視座は、女性の役割や女性が媒介する関係を二次的なものとし、女性は、婚姻を契機に出生した家族から切り離される潜在的他者として捉えられ、婚出する娘は生家にとって一時的でマージナルな存在に過ぎない者として位置づけられてきた。それは、例えば漢民族社会における婚姻儀礼でしばしばみられる娘を象徴的に生家から切り離す儀礼行為にも如実に表れる。婚出する娘は「嫁出去的女児、潑出去的水」ということわざが示すように、「嫁にいった娘は、撒いた水と同じ、もとには戻らない」ものとして生家から切り離され、一度生家を離れた女性は訪問者としてのみ生家に戻ることが許されるよそものとみなされてきた［Judd 1989: 525-526; 植野 2000: 2］。伝統的な漢民族社会の親族組織研究では、娘は生まれた家に属する恒久的な成員ではなく、婚姻を契機に他の集団に属する者とされ、「娘に与える米は捨てるに等しく、娘は価値がないもの」という考え方が広く流布されてきた。

しかしながら、女性が婚姻に際して婚家に入ることは、婚家にとっての労働力となり家を次代につなぐ子孫を生み育てることから、女性の生産と生殖能力は父系社会を維持する上で重要な要件となる。父系という単系組織を維持するのは、婚姻に際し生家から婚家に移動する女性の移動性によるところが大きく、父系血縁関係を維持するためには、女性の交換が生物学的にも不可欠である。しかし、父系社会における生物学的な女性の重要性は

---

[7] 「親属（*qinshu*）」は、自らの血縁も配偶者側の縁者も含む包括的な総称であり、父系関係を表す「親族」と非父系関係をも表す「親属」は異なる。

明らかであるにもかかわらず、女性の果たす社会的役割や重要性については十分に議論されてはこなかった［Strauch 1984: 62-63］。

なぜこれまでの漢民族社会組織の研究において母系や姻戚による社会関係についての議論が極端に少なかったのだろうか。それは、すでに指摘したように「宗族（父系親族）以外の親族関係は、制度化されておらず一般化するための規則らしいものがないため記述することが困難」［Fried 1953: 95］とみなされてきたことも 1 つの原因であろう。姻戚関係や母方親族や姉妹間などの女性親族間関係は、決して価値のないものとみなされてきたわけではないが、そこから一貫した意味や規則性を見出すのは困難だとみなされてきたのである［Strauch 1984: 64］。こうした漢民族社会の親族研究の偏りについて、植野は「漢民族の親族研究が、父系親族を中心に分析をし、特にその組織化された宗族に多くの研究が集中したために、女性自身や女性を媒介とした姻戚関係のもつ意味、さらに日常レベルでの人々の生活の描写を行った研究が相対的に少なかったことと関係している。また、こうした研究動向に対する真剣な反省も近年まで欠如していた」と指摘する［植野 2000: 386］。

このような男性中心的視点による親族研究の伝統は、決して漢民族社会研究にのみ特有のものではない。社会人類学の親族研究においても、父系出自体系における女性と、女性を媒介とする関係を二次的なものとみなす古典的単系出自論［Radcriffe-Brown 1950; Fortes 1953］が長きに渡り主流となっていた。しかし、1970 年代に入ると父系社会を対象とする親族研究においてもこれまでの男性中心的視点を批判的に検証し、女性の存在を前景化する研究［e.g. Yanagisako 1977; Yanagisako and Collier 1987; Strathern 1987］が展開されるようになった。これまで父系出自理念と共に論じられてきた漢民族社会研究においても、視点の転換が認められるようになったのである。

このような研究には、例えば母方親族および姻戚の役割の分析［Gallin 1960; Gallin and Gallin 1985; 植野 2000］、「妻の与え手（wife-giving affines / wife-givers）」のもつ儀礼的意味を検討したエイハンの研究［Ahern 1974］、婚出した娘が生家である「娘家（*nianjia*）」と嫁ぎ先である「婆家（*pojia*）」をどのように往来するのかという点に焦点をあて、漢民族社会の一般的婚姻の枠組みから外れる居住形態（つまり一時的な母方居住）の実際を示したジャッドの研究［Judd 1989］、マレーシアと香港の事例から都市部へ出稼ぎに出るために嫁ぎ先を不在にする嫁と婚家の関係を分析したストラウチの研究［Strauch 1984］などがある。本研究はこうした研究の系譜上に位置づけることができる。すなわち、これまでリニージ・パラダイムの大きな影響のもと看過されてきた関係性を明るみにだし、より幅広い材料から華人社会の親族関係を再考することは、重要な作業であると思われる。このような問題意識から、本研究は子どもの養育実践に焦点をあてることにしたい。

3. 調査地概要

3.1. タワールについて

具体的な事例について言及する前に、本節では本研究が対象とする「故郷」について若

干の概要を示したい。

本研究の調査地であるジョホール州北部に位置するタワール（Tawar 仮称）は人口約 35,000 人の町で、1994 年にマレー半島西部を南北につなぐ南北高速道路（*Lebuhraya Utara-Selatan*）が全面開通したことにより都市部へのアクセスが飛躍的に向上した。そのため、タワールはシンガポールやジョホールバル、クランバレーなどの都市部への労働人口の流出割合が極めて高い地域のひとつとなっている（図 1 参照）[8]。

ジョホール州は地理的に近接した隣国シンガポールへの出稼ぎ者を数多く輩出する地域[9]で、ジョホール州南端の都市ジョホールバルから、日々国境を越えて通勤する越境通勤者も多数にのぼる。特に若い世代の出稼ぎ労働者数は顕著で、タワールの慢性的な人材不足は大きな社会問題であると地区州議会議員の華人政治家が嘆くほどである[10]。

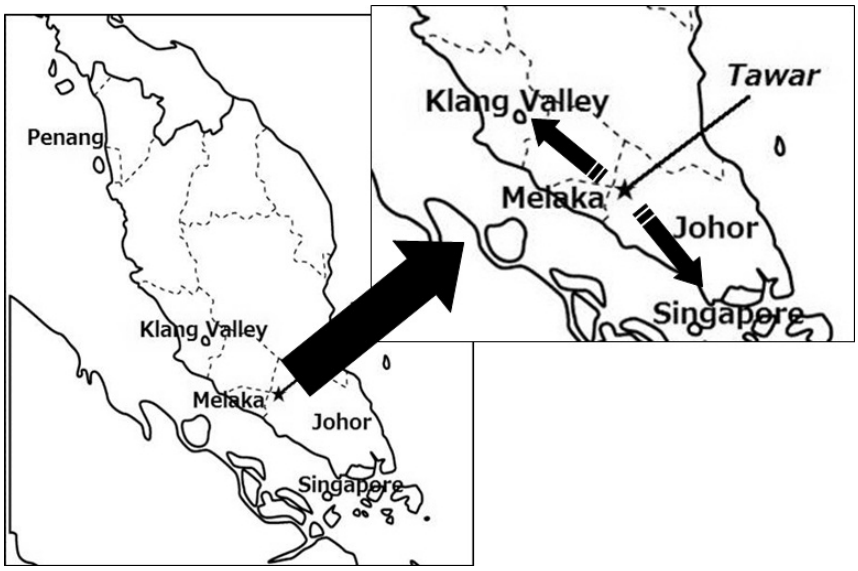


図 1　マレー半島の主要都市とタワールの位置関係

3.2.　事例概要

本稿では 4 組の夫婦の事例を中心に議論を行う。2011 年 2 月時点におけるそれぞれの事例夫婦の居住地と家族構成をまとめたものが表 1 である。それぞれの夫婦のプロフィールは以下の通りである。

---

[8] 調査地ジョホール州の民族割合は、ブミプトラが 57.1%、華人が 35.4%、インド人が 6.9%で［DSM 2000］、ジョホール州はマレーシア 13 州の中で 2 番目に華人人口の割合が高い地域である。タワールは華人人口が全体の 56.5%を占め、華人人口の多い地域といえる［星洲日報 2008 年 3 月 3 日］。

[9] 南アジア、東南アジア諸外国からの外国人労働者を数多く受け入れるシンガポールにとって、マレーシアは言語や習慣など文化的共通点が多い労働力を提供する「伝統的労働力供給源」とされる［Sieh Lee 1988: 105; 石井 1999: 167］。在シンガポールのマレーシア人労働者の中では、ジョホール州出身が一番多く、彼らのほとんどが製造業に従事するという［Sieh Lee 1988: 105］。

[10] 『星洲日報』地方欄に掲載された記事では、タワール選出の州議員である葉熾東は「政府に対して、タワールにおける商業や工業基盤作りと経済状況及び生活の改善を求め、タワール外部へ流出する若年労働者を食い止めたい」と述べている［星洲日報 2006 年 9 月 5 日］。

表１　事例の概要

	夫婦の居住地	夫の就労場所	妻の就労場所	子ども
事例1	都市：ジョホールバル	シンガポール	ジョホールバル	長男（8歳）；次男（5歳）
事例2	都市：クランバレー	クアラルンプール	クランバレー	長男（6歳）
事例3	故郷：タワール （夫がタワール出身）	M町	S町	長女（6ヶ月）
事例4	故郷：タワール （夫婦共にタワール出身）	マラッカ	タワール	長男（2歳）；次男（2ヶ月）

【事例 1】共にタワール出身の 30 代の夫婦。夫婦はマレーシアとシンガポールの国境の都市ジョホールバル（JB）に居住し、夫は日々シンガポールへ通勤している。2 人の子どもは、タワールのそれぞれの両親のもとで養育されている。

【事例 2】妻はタワール出身、夫はタワールの隣町 S 町出身の 30 代の夫婦。夫婦はクランバレーに居住し、子どもは生後間もなく妻の故郷タワールで外部養育制度を利用し養育された。子どもが 1 歳になるとベビーシッターや幼稚園への預け替えなどを巧みに利用しながら、居住地のクランバレーにおいて妻がほぼ単独で養育している。

【事例 3】夫（40 代）はタワール出身、妻（30 代）はタワールの隣町 S 町出身。夫婦は夫の出身地であるタワールに居住し、夫は車で 1 時間の距離にある地域で一番都市化している M 町に通勤している。妻は出身町の小学校教員である。2 人の子どもはタワールのベビーシッターに預けている。

【事例 4】夫婦共にタワール出身の 20 代の夫婦。夫婦は故郷であるタワールに居住し、夫は車で 1 時間半の距離にある近郊都市マラッカで就労している。妻はタワールの小学校教員である。子どもは妻の実家で養育されている。

4.　事例の記述方法について

社会人類学者のアルフレッド・ジェルは著書 *Art and Agency: An Anthropological Theory* において、社会人類学の特徴は事象を「文化」として静的に解釈するのではなく、プロセスや対話、時間の流れに据え文脈の中で解明する点にあるといい、バイオグラフィカル（伝記的）な奥行きのある記述こそ人類学の強みが発揮されると指摘する［Gell 1998: 10-11］。ジェルがいうバイオグラフィカルな記述は、マレーシア華人社会における子どもの養育実践に主眼を置き、当該社会の家族関係の在り方の変化を捉えようとする本研究に

おいても大いに参考になる視点である。

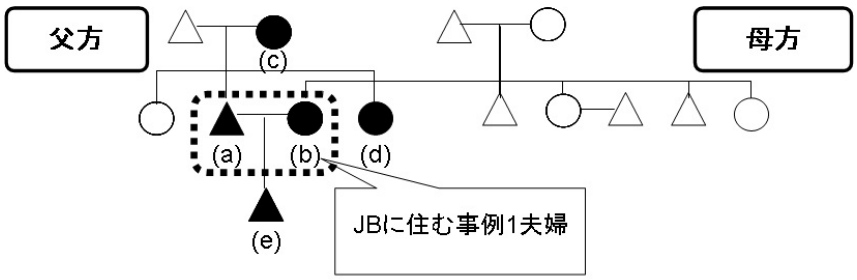
当然のことながら子どもは静的に解釈される対象ではありえない。子どもは、日々変化する社会関係の中で成長し変化を経験する。端的に言えば、最も手がかかる乳児期と学童年齢に差し掛かった子どもに対しては、それぞれ全く異なる養育実践がとられる。そのため、「子どもの養育」と一口に言っても、成長段階によって異なる生活世界を体験することになる。ある一点の養育実践を取り出して、「父系である」、「母系である」、あるいは「外部養育システムを利用している」と断定することは性急であり、その前後の変化を議論することにより家族関係の実際がより明確になるだろう。従って、本研究では子どもの養育実践をめぐる時間的変遷をできる限り聞き取り調査するように務め、少々冗長ではあるかもしれないが、夫婦関係から始まりどのように養育実践が変化したかという点が明らかになる夫婦を中心とした家族の伝記的記述に努める。

4.1.　事例 1

4.1.1. 2001 年から 2006 年まで

事例 1 はタワール出身の 30 代の夫婦（a）・(b）である。夫婦は中学校時代からの幼馴染で、実家は共にタワールの同じ住宅団地内にあり、それぞれの家は徒歩で 5 分程度の位置にある。夫婦は結婚前からすでにジョホールバルに 10 年以上居住している。夫はシンガポールでエンジニアとして働き、妻はジョホールバルのショッピングセンター内の商店の販売員や縫製工場の工員などの短期的雇用に従事している。

夫婦は 2001 年に結婚し、第 1 子である長男（e）は 2002 年に誕生した。妻は出産後もジョホールバルに残って就労すること、また夫と共に暮らすことを希望したため、生まれたばかりの長男はタワールの夫の母（c）と妹（d）によって養育されることになった。図 2 は第 1 子が誕生した 2002 年時点の夫と妻の実家も含めた関係を図示したものである。夫婦は 2～3 週間に一度の割合で居住地のジョホールバルから故郷タワールに帰省していたが、その際も長男に食事を食べさせ、水浴びをさせ、寝かしつけなどの世話をするのは夫の母と妹だった。



破線の範囲はジョホールバルに住む成員を示す

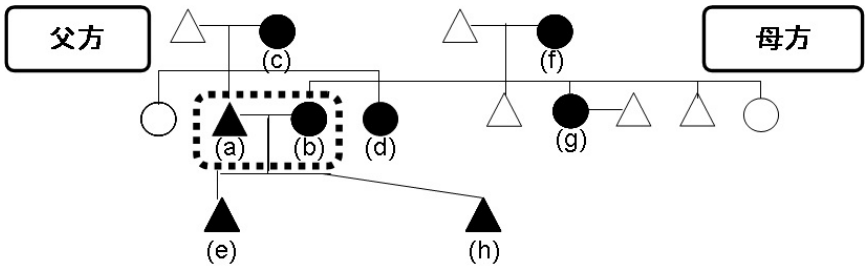
図 2　事例 1：2002 年～2006 年

4.1.2. 2006 年から 2009 年まで

事例夫婦の第 1 子が 3 歳になった 2005 年時点においても、子どもは夫の実家で父方祖母（c）と父方オバ（d）によって養育されていた（図 2 参照）。

2006 年、妻（b）は第 2 子である次男（h）を出産した（図 3 参照）。当初、妻は 2 人目の子どもも 1 人目と同様、夫の実家で養育してもらうことを希望していた。しかしその前年の 2005 年に、誰が夫の姉[11]が出産した子どもの世話をするかで夫の母（c）と妹（d）が揉めたため、事例夫婦の第 2 子は夫の実家で養育することができなくなった。

しかし妻は出産後に再びジョホールバルに戻り就労することを希望していたため、彼女がジョホールバルで養育する、あるいはタワールに戻って二人の子どもの養育をするという選択肢は考えられなかったという。そのため、実家の母（f）と姉（g）に第 2 子の養育を依頼することとなった。このようにして長男は父方祖母・父方オバにより養育されることになり、次男は母方祖母・母方オバにより養育されることになった（図 3 参照）。



破線はジョホールバルに住む成員を示す

図 3　事例 1：2006 年～2009 年

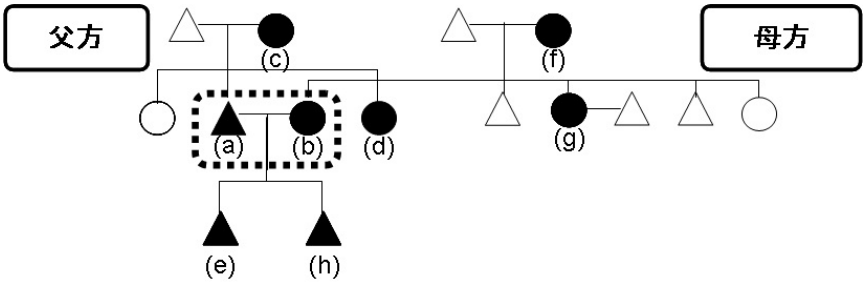
4.1.3. 2009 年以降

2009 年の旧正月前を契機に、それまで妻の母（f）と姉（g）に養育されていた夫婦の第 2 子（h）は父方に戻されることになった（図 4 参照）。その理由は、妻の実家の母が年老いて体の調子があまり良くない日が続き、これ以上子どもの世話はできないということであった。しかし実際には、同居し実家で美容室を経営する娘（g）の子どもたちの世話はしていたので、事例夫婦の子どもの世話の拒否は体の不調だけが理由ではないようであった。夫の母（c）は「外のおばあちゃんの家は商売をやっているから、この子はずっとベビーチェアにくくりつけられて自由に動くこともできなかったようだ。だからこちらに戻ってきて良かった」述べ、孫が母方の祖母ではなく自分のもとに戻ってきたのを喜んでいた。

つまり、第 2 子は 3 歳になって初めて父方の祖父母、オバそして実の兄（e）と共に暮らすようになった訳である。図 4 で示した居住形態は現在も続いており、事例夫婦はジョホールバルに暮らし、2 人の子どもは故郷タワールの実家に暮らし夫の母と未婚の妹により養育されている。このように家族が異なる場所で日常生活を送る暮らしの中で、事例 1 の男

[11] この人物は、事例 2 夫婦の妻である。この顛末については事例 2 で説明する。

性は、退職した父には毎月 RM250（約 7,500 円）を生活費の一部として渡しているが、息子たちの養育を引き受けてくれている母には RM600（約 18,000 円）を渡している。



破線はジョホールバルに住む成員を示す

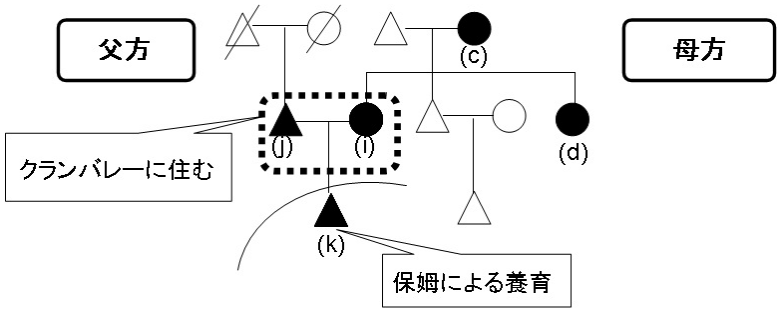
図４　事例１：2009 年～現在

4.2.　事例 2

4.2.1. 2005 年から 2006 年まで

事例 2 はタワール出身の 30 代女性（i）と、その隣に位置する S 町出身の 30 代男性（j）の夫婦である（図 5 参照）。夫婦は 2004 年に結婚した。脚注 11 で言及したように、この事例の女性は事例 1 夫婦の夫の姉である。

事例の夫は若くして両親を亡くし兄弟もいないため、出身地の S 町に帰省する機会は少なかった。大学卒業後はそのままクアラルンプールに居住し、現在はクアラルンプールの私立大学の事務職員として働いている。妻は独身時代、ペナンの国立大学で数学の修士号を取得した後シンガポールで教員になることを目指していたが、体調不良が重なり実家のあるタワールに戻り療養生活を送りながら近くの小学校で臨時教員として勤めていた。2004 年の結婚を契機にクアラルンプールの中学校教員となった。結婚翌年の 2005 年、妻は実家タワールの産院で第 1 子となる長男（k）を出産した（図 5 参照）。



破線はクランバレーに住む成員を示す

図５　事例２：2005 年～2006 年

タワールで 2 ヶ月の産休期間[12]を過ごした後、妻はクランバレーに戻ることになった。しかし結婚を契機にクランバレーに住み始めた妻は、不慣れな都市では信頼のおける子どもの預け先に心当たりがなかったため、実家の母（c）に子どもの養育を依頼した。しかし、実家の母は 2002 年に生まれた息子夫婦の第 1 子（e）の養育で手一杯でこれ以上赤ん坊の世話はできないと娘の頼みを断った[13]。妹（d）は何とか姉の子どもの世話をしようと尽力したが、結局母の一言で他の方法を探さねばならなくなった。

困り果てた彼女（i）は、最終的には実家の母の知り合いで同じ住宅団地に住む 60 代の女性に乳母（保姆 *baomu*）として子どもの世話を依頼することにした。これは、1 ヶ月 RM600（約 18,000 円）[14]を支払うことにより週末を除く平日は保姆の自宅で終日子どもを養育してもらうという契約だった。こうして、実家の母に子どもを養育してもらうという当初の目論見は破れたが、保姆による養育という方法を選択することによって妥協的に実家の協力を得て「故郷で子どもを育てること」が可能となった。タワールの保姆に養育を依頼することは、結局実家の母（c）と妹（d）も子どもの養育という行為実践に巻き込むことになったからである。

複数の子どもの面倒はとても見られないと言って娘の子どもの養育を拒否した母は、そうはいっても保姆のもとに預けられた外孫の様子を週に 1 度以上は確認しに行き、その都度クランバレーに住む女性（i）にその様子を電話で報告していた。様子を確認しに行く際は内孫（e）を連れて、隣近所の知り合いの家にお茶でも飲みに行くような気軽さで頻繁に訪れた。毎週末開かれる夜市に出かける時には敢えて保姆の家の前を通り外から声をかけることもあれば、クランバレーに住む子どもの母（i）の指示を受け不足分の紙おむつや粉ミルクを渡すために保姆を訪れることもあった。また週末になると事例 2 夫婦はタワールに帰省し、保姆に預けられている我が子を一時的に連れ出して実家で過ごしていた。このようにして、事例 2 の妻（i）は直接的には実家の母に子どもの養育を引き受けてもらうことはできなかったが、母や妹による日常的育児協力を得て、都市に働き故郷で子育てをする生活を維持することが可能となった。

4.2.2. 2006 年から 2008 年まで

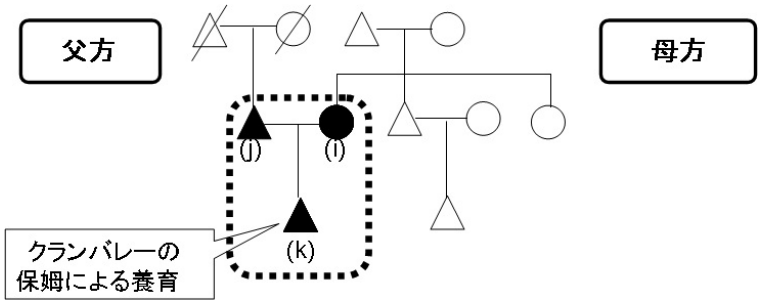
---

[12] マレーシアでは出産休暇（42 日間）は女性公務員にのみ認められる有給休暇である。また 90 日までの育児休暇（無給）も女性職員にのみ認められている。在職期間中に 5 回まで利用することができる［日本人事院行政研究所 1997: 92］。

[13] その後、事例 1 夫婦の妻が第 2 子（h）を妊娠し子どもの養育を再度夫の母と妹に依頼した際、事例 2 夫婦の子どもをめぐり母娘間で確執があった経緯を引き合いに出され、依頼が拒否された。この一連の流れを横で見ていた女性（d）（彼女は、事例 1 夫婦の夫の妹であり、事例 2 夫婦の妻の妹である）は、母（c）に「姉の子どもの世話を〈二人以上の子どもの世話ができない〉という理由で断ったのだから、兄の子どもも引き受けるべきではない」に進言した。結局事例 1 夫婦の子どもは、妻の母と姉の下で養育されることになった。

[14] 事例 2 の妻（i）の月収は当時 RM2000（約 60,000 円）であった。

2006 年、妻 (i) はそれまで勤務していた国民中学校から華文小学校の教員に転職した[15]。1 年間妻の故郷のタワールで子ども（k）を養育してきた事例 2 夫婦は、2006 年には子どもを都市クランバレーで養育することにした。それは、妻が職場の同僚の助けを得て自宅近くに評判の良い保姆を確保することができたからであった。この時の契約は、妻の勤務時間の日中に子どもの世話をしてもらうというもので、1 ヶ月 RM500（約 15,000 円）であった（図 6 参照）。



破線はクランバレーに住む成員を示す

図 6　事例 2：2006 年～2008 年

4.2.3. 2008 年以降

2008 年、妻（i）は華文小学校から華文小学校附属幼稚園の教員へ異動した。前職の小学校勤務時は高学年クラスの担任で多忙な日々を送っていたため、幼稚園に異動し子育てしやすい環境に身を置きたかったのだという。幼稚園勤務は、会議などの午後の業務がない日は午後 1 時半から午後 2 時半頃に帰宅することができるため時間の融通がきき、また 3 歳になった息子（k）を自分の勤務先である幼稚園に入園させることによって、働くことと子育てを同じ場所で両立することが可能となったという。保姆に子どもを預けると 1 ヶ月 RM600（約 18,000 円）ほど支払う必要がるが、自分の職場である幼稚園に子どもを入園させることによりお金の節約にもなるのだと事例 2 の女性は説明した[16]。

またこの頃、夫（j）は郊外に住宅を購入した後も手放さずに保有していたクアラルンプールのアパートに単身で暮らすようになっていた。これは通勤の至便性を考慮した上での苦肉の策であった。郊外にある夫婦の自宅と夫の職場があるクアラルンプールは約 50km の距離があり通勤可能な距離ではあったが、昨今の朝夕の交通渋滞は酷く、午前 8 時まで

---

[15] 「国民学校（*Sekolah Kebangsaan*）」は教授用語がマレー語の学校である。華文学校とは、正確には「国民型華文小学校（*Sekolah Kebangsaan Jenis Cina*）」のことで、教授用語が標準中国語の小学校で学童のほとんどがマレーシア華人の子弟である。

[16] 2011 年 1 月の聞き取り調査によると、女性の月収は RM3000（約 90,000 円）であった。毎月の主な固定的使途の内訳は、住宅ローン返済に RM1100、車購入ローンの返済に RM1000、実家の父親と母親にそれぞれ RM250 ずつ生活費として渡しているので、自由に使える分は少ない。夫の給料と合わせてなんとか生活が成立している状況のため、保姆に支払う費用を捻出することは金銭的に厳しいだろうと女性の母親は筆者に説明した。

に出勤するためには午前 6 時前には家を出発しなければならないため疲弊してしまったのだという。そこで、平日はクアラルンプールのアパートに単身で居住することにしたのだという。そのため、夫婦は平日のみクアラルンプールとクランバレー郊外に別居することとなり、平日のほとんどは妻が 1 人で子どもを育てることになった（図 7 参照）。

このような居住形態について彼女は特に不満には感じていないという。2011 年 2 月に聞き取りをした際、彼女は「平日は幼稚園での仕事が終わったら息子を連れて夕食を外で簡単に食べてから帰宅して、その後宿題をさせて寝かしつけるだけだから大変なことはないのよ」と述べた。

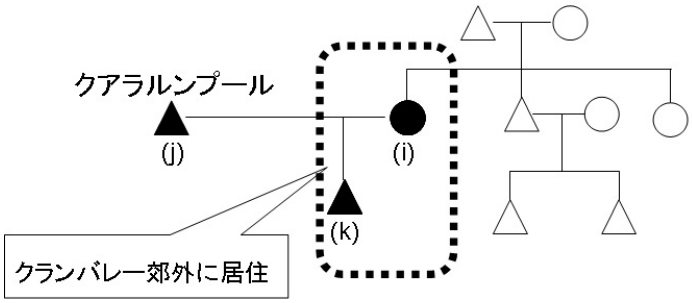


図 7　事例 2：2008 年～現在

4.3.　事例 3

4.3.1. 2008 年から 2009 年まで

事例 3 はタワール出身 40 代男性（l）と、その隣に位置する S 町出身の 30 代女性（m）の夫婦である。夫婦は 2008 年に結婚した。夫はタワールから車で 1 時間の距離にある都市 M 町で営業職に従事している。妻は出身地 S 町の華文小学校の教員である。結婚した当初、夫婦は夫の父方祖母（n）の家で暮らし祖母の世話をしていたが、2009 年にタワールの住宅団地内に住宅を購入し転居した（図 8 参照）。

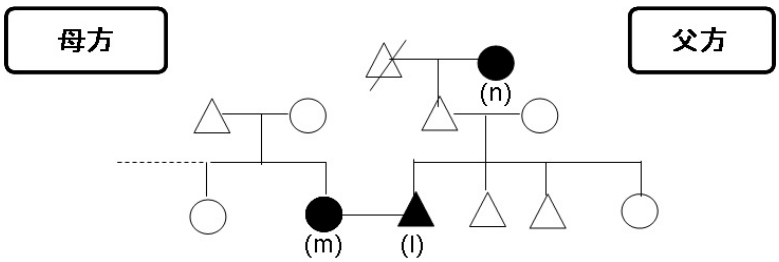


図 8　事例 3：2008 年～2009 年

4.3.2. 2010 年以降

2010 年、夫婦に第 1 子となる長女（p）が誕生した。当初から妻の実家の両親はどちら

も就労しているため娘の子どもを世話することができないということだったので、生まれる子どもの養育は、夫の母（o）が担うこととなっていた。しかし、孫を預かった 3 日後に夫の母は重度の糖尿病のため突然倒れ、長期入院することになってしまった。その後退院することはできたが、手足を自由に動かすことが困難となり、乳児の養育を行うことは事実上不可能となってしまった。最終的に夫婦はどちらの実家も頼ることができなくなったので、保姆と 1 ヶ月 RM350（約 10,500 円）で契約を結び子どもを預けることにした。朝、夫が出勤する前の午前 9 時頃に子どもを保姆預け、午後 5 時頃に妻が引き取りに行く。妻が職場のある S 町からタワールに戻るのは午後 2 時頃であるが、託児契約は夕方 5 時までなので、妻は帰宅後すぐに子どもを迎えには行くことはせず、午後は家事をしたり自由に過ごすという。（図 9 参照）。

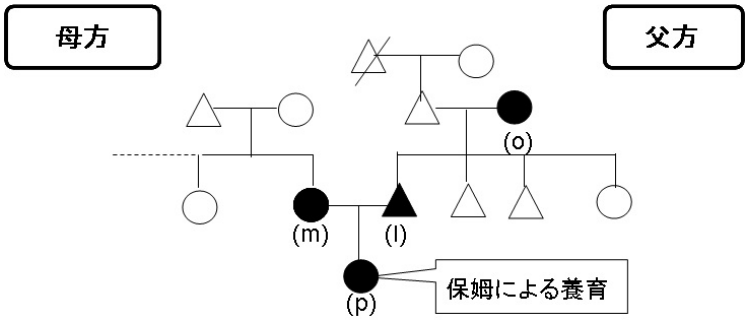
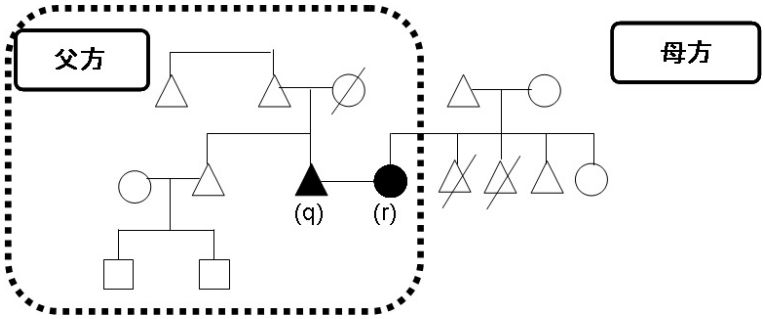


図 9　事例 3：2010 年～現在

4.4.　事例 4

4.4.1. 2007 年から 2009 年まで

事例 4 はタワール出身の 30 代の夫婦である。夫婦はタワールのキリスト教会での勉強会で知り合い結婚を決めた。夫（q）はタワールから車で 1 時間半の距離にある都市マラッカでエンジニアとして働き、妻（r）はタワールの華文小学校の教員である。結婚後、夫婦はタワールの中心地区にある夫の実家に同居した（図 10 参照）。

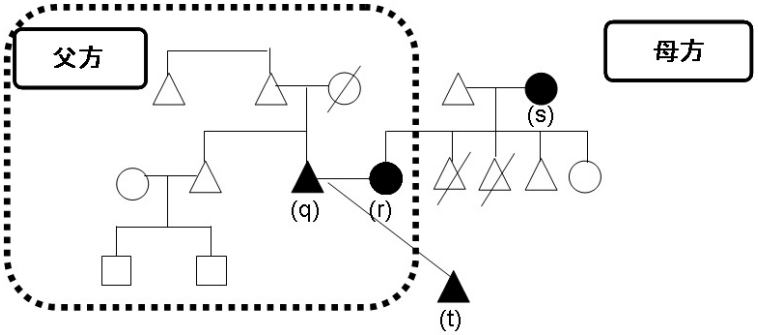


破線は同居範囲を示す

図 10　事例 4：2007 年～2009 年

4.4.2. 2009 年から 2010 年末

2009 年、夫婦に第 1 子となる長男（t）が誕生した（図 11 参照）。夫の母はすでに他界しており夫の実家には女手が足りないため、事例 4 の妻は仕事をしながら子育てをするには無理があると判断し、生まれた子どもはタワールにある妻の実家の母（s）に預けることにした。実家の母に養育してもらう対価として、事例 4 夫妻の妻（r）は母（s）に毎月 RM600（約 18,000 円）渡した。



破線は同居範囲を示す

図 11　事例 4：2009 年～2010 年末

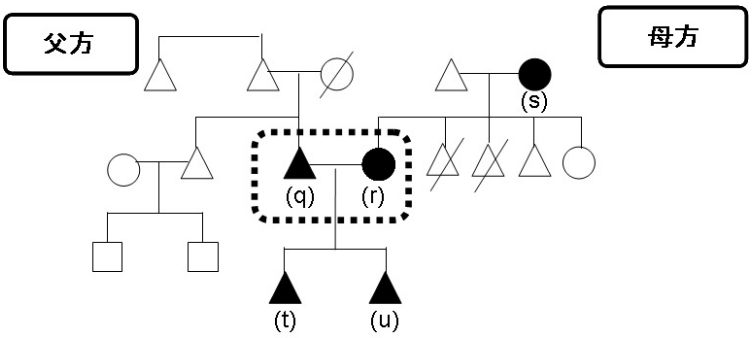
事例 4 の女性は母親とは別に父には毎月 RM1000（約 30,000 円）を渡していたので、両親には月収の半分近くを渡していたことになる。近所の人に聞くところによれば、彼女の父は 60 歳を過ぎた現在も就労しており、別段お金に困っている様子はないという。「婚出した娘にお金を要求するのはひどい」と近所の女性（60 代）は言った。また、孫の世話を母がするにしても、毎月 RM600（約 18,000 円）は受け取りすぎであり、外に預けるにしても RM700（約 21,000 円）が相場であるから、渡しすぎなのではないかと噂していた。しかし妻本人によると、彼女は結婚後も長女として家を支えていく必要があると考えていた。実際、結婚する以前は一生独身のままで両親の世話をするつもりだと話していたが、それは夭折した 2 人の兄の代わりに自分が家を守らなければならないと考えていたからであった。そのため、彼女は就職して以降折に触れ両親にお金を渡すようにしていたのだが、結婚後も変わらず親には金銭的援助を行っていた。

4.4.3. 2011 年以降

国家公務員である妻（r）は低金利で住宅ローンを組むことができるため、2010 年、妻の実家近くに中古住宅を購入し、夫婦は夫の実家を出ることにした。そもそも夫の実家は古い上に 3 部屋しかないため常に人があふれているような状態で、三世代で同居するには手狭であったという。

2010 年末、夫婦に第 2 子となる次男（u）が誕生した（図 12 参照）。筆者が調査を行っ

た 2011 年 2 月は、事例女性は産休期間中で翌月の 3 月から職場復帰することになっていた[17]。その時点では 2 人の子どもの養育をどうするかは未定で、実家の母に依頼する場合、いくら渡すべきか決めかねているようだった。しかしおそらく 2 人ともしばらくの間は実家の母に預けて養育するつもりのようだった。



破線は同居範囲を示す

図 12　事例 4：2011 年～現在

4.5.　まとめと考察

ここまで概観してきた 4 組の夫婦の子どもの養育実践をまとめると、以下の点でそれぞれの夫婦の状況が共通していることが分かった。

① 女性の就業は子どもの養育より優先される
② 子どもの養育はリタイアした夫婦の両親（主に母）が担う事例が多く、何らかの事情によりそれが困難な場合は、保姆などの外部養育サービスを利用して行われる
③ 女性と実家との密接な関係は婚出後も維持される

斧出・藤田によれば、台湾やシンガポールなどの漢民族社会では、結婚出産にかかわらず働く女性が増加している。例えば、台湾では 1980 年の女性の労働は結婚育児期に労働力率が下がり、育児がひと段落した 40 代頃に再び上昇し、その後しばらくするとまた下降する M 字型曲線を描いていたという。しかし 1995 年以降は女性の高学歴化により就労時期が遅くなり、労働力ピークは 20 代後半に移行している。2004 年の年齢階梯による女性の労働率をみると、20 代後半をピークに 40 代前半までの女性の就業率は 60%以上であるのに対し、50 代になると急激に低下する逆山型曲線を描くという［斧出・藤田 2007: 143］。またシンガポールにおいても 20 代後半から 30 代前半の女性の労働率は、75～85%と高い水準を推移し、「子どもが生まれたので仕事を辞める」という規範はあまりみられないという［Government of Singapore 2002: 52; 木脇 2007: 230］。

[17] 公務員の産休期間は 2 ヶ月と 3 ヶ月から選択することができるという。事例 4 の女性は将来的にあと 3 人の子どもを出産したいと考えているため、2 ヶ月の産休を選択したという。

同様に、マレーシア華人社会でも育児期の女性がペースダウンをせずに労働に従事し続けることは一般的である。子を生んだ母が子どもを育てなければならないといった「母親規範」［木脇 2007: 232］は特に認められず、本稿で紹介した事例の女性たちにおいても、子どもの養育に専念するために仕事を辞めるという選択は一切みられなかった。むしろ、就業を維持するためには、②で挙げたように、父方、母方あるいは外部養育サービスなどあらゆる手段を利用して子どもを養育していることが分かった。

事例の女性たちが子どもを産み育て、なおかつ仕事を辞めずに生活を維持していく上で、実際の養育者としての祖父母を確保することは最重要事項であった。しかしこの点は家族内に緊張を生じさせうる。事例 1 の第 2 子（内孫）と事例 2 の第 1 子（外孫）の養育に際し、どちらの子どもを育てるかで母と娘の関係に緊張が生じたが、妹の助け舟によりこの衝突は回避された。この事例では問題解決のため、事例 1 女性の義理の母であり事例 2 女性の実母である女性（c）は、内孫も外孫もどちらも養育しないと決定した。未婚の妹（d）は、母が兄嫁の子どもだけを養育しないよう積極的に母に進言し、そして姉の子どもが保姆により養育されることになると母と連れ立ち姉の子どもの様子をできる限り見に行くようにしていた。一方、第 2 子の養育を夫の実家側に拒否された事例 1 の女性も、実母と実姉を頼ることにより、子どもの養育と都市で働き続けることを両立することができたのである。このように子どもの養育という実践を通して、女性の婚出後も密接な母娘関係、姉妹関係が維持されていることが分かった。

さらに、これはまだ推論に過ぎないが、定年年齢が 40 代後半から 50 代と比較的早いマレーシアでは、孫の養育に協力することは「老後のしごと」として認識されている可能性がある。孫の養育を担うことにより、事例 1 と事例 4 の 60 代女性たちは毎月 RM600（約 18,000 円）を受け取っている。市場の相場額（RM500（約 15,000 円）から RM700（約 21,000 円）程度）と比較しても大差ない金額を親に支払うことで、子どもは両親に対しある種の経済的支援を行っているとみなすことも可能である。この点についてはさらに詳細な聞き取り調査と参与観察の実施し、認識と実践のレベルから明らかにする必要があるだろう。

また、③で挙げた母方親族との密接な関係はすべての事例に共通するわけではないが、指摘しておくべき重要な点である。

シルビア・ヤナギサコは、父系出自が前提とされる社会においても女性親族間の緊密な人間関係が存在することをロンドンの労働者階級や中流階級の事例［e.g. Firth and Djamour 1956; Bott 1957; Young and Willmott 1957; Willmott and Young 1960; Rosser and Harris 1965; Firth, Hubert and Forge 1969］や、ニューヨークの東ヨーロッパのユダヤ系アメリカ人家族［Leichter and Mitchell 1967］の事例から指摘している［Yanagisako 1977: 207］。

これらの集団に共通してみられるのは、①共住、②居住の近接、③相互扶助、④頻繁な交流、⑤親族間の強い感情的紐帯のパターンが認められるという点である。ヤナギサコが

指摘した女性親族間関係にみられる 5 つの特徴のうち、本稿では十分に記述することはできなかったが、姉妹や母娘間の③相互扶助、⑤感情的紐帯は、調査をする上で何度も確認できるものであった。一方、①共住、④頻繁な交流は、故郷を離れ都市に居住する者が多いマレーシア華人社会においては必ずしもみられなかった。しかし物理的な往来が不可能でも頻繁に携帯電話で連絡を取り合うことによる密な交流は維持されていた。また②居住の近接という点については、配偶者選択の際に近距離居住者を選ぶ傾向が本稿で提示した事例には共通していた。

事例 1 と事例 4 の夫婦はタワールを出身地とする者同士であり、事例 2 と事例 3 については出身町こそ異なるものの、タワールの隣町であった。このように女性が実家のある町と近接した場所に嫁ぐことは、婚姻後、実家（特に女性親族）との緊密な協力関係を維持する上で非常に重要な実践であるとみなすことができる。ジャッドやストラウチも、妻の実家と婚家の近接性は、女性関親族関係を維持する上で重要な要因であることを指摘している［Strauch 1984; Judd 1989］[18]。

5. おわりに

本稿ではマレーシア華人女性の子どもの養育実践について紹介し、華人社会の家族関係の変化を議論するための材料として検討を行ってきた。

前章で概観したように、生まれてすぐに母方祖母や母方オバに養育された子どもであっても、一時を過ぎれば父方に戻されることもあるため、ある時点の現象をもって「マレーシア華人社会における子どもの養育実践は双系的である」とみなすことはできないだろう。また一方で、「手のかかる乳幼児期を過ぎると父方に戻されるということは、結局華人社会は強力に作用する父系理念によって再調整されている」というのも性急すぎる結論であるだろう。

確かに生まれと最終的な所属は父系が重視されるが、その養育過程においては双方の系の関係を最大限に利用しながら実践されることが本稿の事例から明らかとなった。このような実践がみられる最大の理由は、父系にこだわり子育てをすることが今日の少子高齢化するマレーシア華人社会においては事実上不可能であるというシンプルな事実にある。現実を生きるには柔軟に潜在的な関係を利用し、子孫をつないでいくことがなにより優先されるため、父系に限定した関係だけではない実家の女性たちの協力を得て柔軟な子育てが実践されるのだろう。

植野と蓼沼は「娘と親との関係には恣意的・感情的な行為が多いという側面があり、制度として非常にとらえにくい問題が多くある」ことを指摘しているが［植野・蓼沼編 2000: 2］、確かに女性親族間のつながりは曖昧で、父系理念による規範ほど明瞭にその規則の輪

[18] ヤナギサコはこのような関係を「母方中心性（matrifocality）」と呼ぶのではなく「女性を中心した親族ネットワーク」と称している。それは、「母の（matri-）」という接頭辞が示すように「母方中心性（matrifocality）」という言葉は母を中心とした関係性を喚起させるため、女性を中心とした関係を示すには適当でないからである［Yanagisako 1977: 208］。

郭を描くことはできない。それは「例外的に行われている」だとか「バリエーションに過ぎない」と表現され、決定的な事実にならぬよう巧みにやり過ごされてしまう。このような関係性は「モデルに適合しない日常実践」［Judd 1989: 537］にすぎないと認識されることがほとんどである。

ジャッドは「人びとはフォーマルな理念について語ること、そしてそのバリエーションやどのように習慣が変化しているかについて説明することには慣れている。それとは対照的に、女性とその生家のつながりのパターンについて人びとが自発的に語ること、あるいは指摘することはない」［Judd 1989: 537-538］と述べているが、人びとの語りには表れない関係性に、つまり日常生活と実際の実践にこそ注視すべきである。語られる事実だけをなぞれば父系理念が作用した親族関係を描き出すことになるだろう。しかし、結婚した女性は婚家に属しながらも、日常実践レベルにおける親族関係の範疇としてのつながりを、自己の実家を中心に展開し維持し続けることができるのである。

狩猟採集民の定住戦略を民族誌的手法で明らかにした考古学者ルイス・ビンフォードは「（狩猟採集民にとり）場所は同質ではなく、システム内における各自の役割により様々である」［Binford 1980: 4］ことを指摘しているが、マレーシア華人社会においても同様のことがいえるのだろう。マレーシア華人にとって、移住先（あるいは出稼ぎ先）や故郷は、絶対的な場所なのではなく、移動により連関する相対的なものであり、それぞれの場所は生活範囲とでも名付けることができるような拡張された領域なのではないだろうか。

それぞれの場所は経済活動を行う場所、象徴的儀礼行為、子どもの養育を行う場所というように場所に付随する役割に結び付いた意味を持ち、それらの場所がつながることによってはじめて生活が成立するのである。マレーシア華人の生活空間は、移住先や出稼ぎ先の都市部と故郷の田舎町という複数の地点を巻き込みながら形成される。それはどちらが欠けても成り立たない、移動することにより安定する日常生活である。

都市と故郷との密接な関係を維持することは、都市労働者にとっての生命線である。「移動する人びとは二つの領域にまたがって生き」［Strauch 1984: 60］、二つの領域の往来により関係性のネットワークを張り巡らせ生活を維持する。このようにして、安定的に生活すること、そして移動しながら根を下ろすことが可能となる。この移動しながら根を下ろし、家を次代につなげていく暮らしを成立させる上で欠くことができないのは、女性親族間の密接なつながりである。母や姉妹の協力を得ることによって、故郷に不在でありながら故郷で子どもを養育することが可能となるのである。

このようにして、故郷を離れ都市で労働する女性が多いマレーシア華人社会においては、女性親族間ネットワークを駆使して子どもの養育実践が柔軟に行われていることが明らかとなった。この実践が彼らの理念にどのような影響を与えているのかという点を明らかにするのが次の課題である。

参考文献

Ahern, Emily M. 1974. "Affines and the Rituals of Kinship." In *Religion and Ritual in Chinese Society*, edited by Arthur P. Wolf. 279-307. Stanford: Stanford University Press.

Binford, Lewis R. 1980. "Willow Smoke and Dog's Tails: Hunter-gatherer Settlement System and Archaeological Site Formation." *American Antiquity* 45(1): 4-20.

Bott, Elizabeth. 1957. *Family and Social Network: Roles, Norms, and External Relationships in Ordinary Urban Families*. London: Tavistock.

Chang, Shin. 1990. *The Jia and Descent Ideology: Chinese in Rural Malaysia.* Ph.D. Thesis, University of Colorado at Boulder.

Department of Statistics, Malaysia (DSM). 2001. *Population and Housing Census of Malaysia 2000: Population Distribution and Basic Demographic Characteristics*. Putrajaya: Department of Statistics Malaysia.

————, 2008. *State/District Data Bank*. Putrajaya: Department of Statistics, Malaysia.

Dore, Ronald. P. 1958. *City Life in Japan.* Berkeley: University of California Press.

Government of Singapore. 2002. *Yearbooks of Statistics Singapore*.

Firth, Raymond and Judith Djamour. 1956. "Kinship in South Borough." In *Two Studies of Kinship in London,* edited by Raymond Firth. London School of Economics Monographs on Social Anthropology no. 15. 33-66. London: The Athlone Press.

Firth, Raymond, Jane Hubert and Anthony Forge. 1969. *Families and Their Relatives: Kinship in a Middle-Class Sector of London*. London: Routledge and Kegan Paul.

Fortes, Meyer. 1953. "The Structure of Unilineal Descent Groups." *American Anthropologist.* 55: 17-41.

Freedman, Maurice. 1958 (1991). *Lineage Organization in Southeastern China.* London: Athlone.

————, 1966 (1987). *Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung*. London: Athlone.

————, 1979. *The Study of Chinese Society*. Stanford: Stanford University Press.

Fried, Morton H. 1953. *Fabric of Chinese Society: A Study of the Social Life of a Chinese County Seat.* New York: Praeger.

Gallin, Bernard. 1960. "Matrilateral and Affinal Relationships of a Taiwanese Village." *American Anthropologist* 62(4): 632-642.

Galling, Bernard and Rita Gallin. 1985. "Matrilateral and Affinal Relationships in Changing Chinese Society." In *The Chinese Family and Its Ritual Behavior*, edited by Hsieh, Jih-chang and Ying-chang Chuang. 101-116. Taipei: Institute of

Ethnology, Academia Sinica.

Gell, Alfred. 1998. *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford: Oxford University Press.

石井由香、1999、『エスニック関係と人の国際移動――現代マレーシアの華人の選択』国際書院

Judd, Ellen R. 1989. "Niangjia: Chinese Women and Their Natal Families." *The Journal of Asian Studies* 48(3): 525-544.

木脇奈智子、2007、「シンガポールの子育てと子育て支援」落合恵美子・山根真理・宮坂靖子（編）『アジアの家族とジェンダー』、pp. 230-244、勁草書房.

Lee, Boon Thong. 2004. "'Placelessness': A Study of Residential Neighbourhood Quality Among Chinese Communities in Malaysian Cities." In *The Chinese Population in Malaysia: Trends and Issues*, edited by Voon Phin Keong, 125-134. Kuala Lumpur: Centre for Malaysian Studies.

Leichter, Hope J. and William E. Mitchell. 1967. *Kinship and Casework*. New York: Russell Sage Foundation.

日本人事院行政研究所、1997、『アジア諸国の公務員制度（Ⅱ）――アジア諸国の公務員制度に関する調査研究報告書』財団法人日本人事院行政研究所.

斧出節子・藤田道代、2007、「台湾の育児」落合恵美子・山根真理・宮坂靖子（編）、『アジアの家族とジェンダー』pp. 143-159、勁草書房.

Radcliffe-Brown, A. R. 1950. "Introduction." In *African Systems of Kinship and Marriage*, edited by A. R. Radcriffe-Brown and Dary Forde. 1-85. London: Oxford University Press.

レルフ、エドワード、1991（1976）、『場所の現象学――没場所性を越えて』（高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳）筑摩書房.

Ross, Marc H. and Thomas. S. Weisner. 1977. "The Rural-Urban Migrant Network in Kenya: Some General Implications." *American Ethnologist* 4(2): 359-375.

Rosser, C. and C. Harris. 1965. *The Family and Social Change.* London: Routledge and Kegan Paul.

櫻田涼子、2008、「『家』を生きる――マレーシア華人社会における関係の諸相」『華僑華人研究』5: 69-93.

――――, 2010, 『家をめぐる人類学的研究――マレーシア華人とテラスハウスの相互構築的民族誌』筑波大学博士学位請求論文.

瀬川昌久、2004、『中国社会の人類学――親族・家族からの展望』世界思想社.

Sieh Lee, Mei Ling. 1988. "Malaysian Workers in Singapore." *Singapore Economic Review* 33(1): 101-111.

星洲日報、2006 年 9 月 5 日.

————, 2008 年 3 月 3 日.

Stafford, Charles. 2000. "Chinese Patriliny and the Cycles of yang and laiwang." In *Culture of Relatedness: New Approachs to the Study of Kinship*. Janet Carsten, edited by. 37-54. Cambridge: Cambridge University Press.

Strathern, Marilyn. 1987. "Producing Difference: Connection and Disconnections in Two New Guinea Highland Kinship Systems." In *Gender and Kinship: Essays Toward a Unified Analysis*. edited by Jane F. Collier and Sylvia Junko Yanagisako. 271-300. Stanford: Stanford University Press.

Strauch, Judith. 1984. "Women in Rural-Urban Circulation Networks: Implications for Social Structural Change." In *Women in the Cities of Asia*, edited by James T. Fawcett, Siew-Ean Khoo and Peter C. Smith. 60-77. Boulder: Westview.

Sweetser, D. Apple. 1966. "The Effect of Industrialization on Intergenerational Solidarity." *Rural Sociology* 31: 156-70.

植野弘子、2000、『台湾漢民族の姻戚』風響社.

植野弘子・蓼沼康子（編）、2000、『日本の家族における親と娘——日本海沿岸地域における調査研究』（アジア研究報告シリーズ No.2）風響社.

Yanagisako, Sylvia Junko. 1977. "Women-Centered Kin Networks in Urban Bilateral Kinship." *American Ethnologist* 4(2): 207-226.

Yanagisako, Syliva Junko and Jane Fishburne Collier. 1987. "Toward a Unified Analysis of Gender and Kinship." In *Gender and Kinship: Essays Toward a Unified Analysis*, edited by Jane F. Collier and Sylvia Junko Yanagisako. 14-50. Stanford: Stanford University Press.

Young, Michael and Peter Willmott. 1957. *Family and Kinship in East London*. Glencoe, Illinois: The Free Press.

Waltner, Ann. 1995. "Kinship Between The Lines: The Patriline, The Concubine and The Adopted Son in Late Imperial China." In *Gender, Kinship, Power: A Comparative and Interdisciplinary History*, edited by Mary Jo Maynes, Ann Waltner, Birgitte Soland and Urrike Strasser. 67-78. New York: Routledge.

Watson, James. 1986. "Anthropological Overview: The Development of Chinese Descent Group." In *Kinship Organization in Late Imperial China, 1000-1940*. Patricia Buckley Ebrey and James L. Watson (eds.), pp. 274-292. Berkeley: University of California Press.

2010 年度次世代研究「都市と故郷の往還的移動による家の維持 ―マレーシア華人社会における女性の労働と子どもの養育をめぐる人類学的研究―」（研究代表：櫻田涼子）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2010 年度プロジェクト時点

櫻田 涼子 （京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）